

観光資源としての 建築の可能性

〈下〉

日本政府観光局(JNTO)がまとめた2019年訪日外国人人数は、前年比2.2%増の3188万2100人となり過去最高を更新した。これに伴って、訪日外国人旅行消費額も前年比6.5%増の4兆8113億円(観光庁発表)に達した。訪日外国人人数が1000万人を超えた13年以来、飛躍的に伸びている日本のインバウンド観光産業は自動車、化学製品の輸出額に次ぐ基幹産業となった。急成長するインバウンドについて、観光庁の施策も多岐にわたり、民間や自治体の新たな展開への支援も増えている。観光資源の発掘と磨き上げ」に取り組む同庁観光資源課に、文化財、古民家、城郭などの建築物を活用した取り組みを中心に現状と今後の展開を聞いた。

を主目的にした一般的な海外からの旅行はあまり聞かないと話す。ただ、文化財を含む建築には非常にポテンシャルがあり、建築の好きな旅行者がいることは承知していると述べる。

アンケートでは4割以上の上位に続く回答として、30%の「温泉入浴」、22%の「旅館に宿泊」も見られ、これらの回答では料亭や商業施設などの建物に訪れることになり、日本を代表する建築家による設計も多数含まれる。観光資源課が取り組む「観光資源の発掘と磨き上げ」の中に、こうした建物のガイドに建築の専門的な視点も取り入れることで、外国人観光客の新たなニーズにつながることも考えられる。

**文化財は公開・活用
多言語解説を**
では、観光庁が現在展開してい

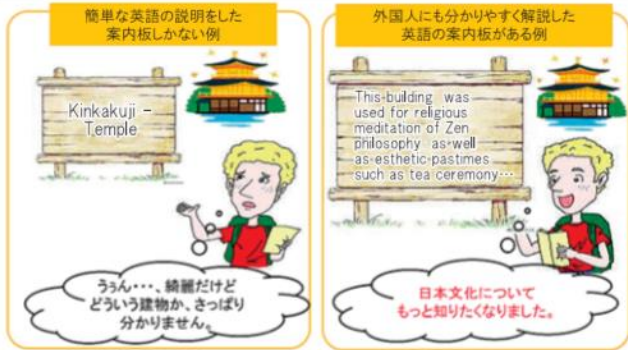
消費動向上位の建築物 にもスポットライトを

これまでの連載では、日本建築が欧米だけでなくアジアから見ても独自性に富んでいること、そしてその素晴らしさを外国人観光客にしっかりと伝えられていないことと、一方で、数少ない1級建築士の通訳案内士が少しずつ日本建築の魅力ガイドングしている現状を紹介してきた。

観光庁のアンケート「訪日外国人消費動向調査」(16年)によると、訪日前に期待していたことのトップは「日本食を食べること」だった。複数回答の調査だが、7割を超えている。次いで55%の「ショッピング」、48%の「自然・景勝地観光」、41%の「繁華街の街歩き」と続いている。このアンケートの質問には例えば「有名な建築の観光」といった項目はない。同庁の観光資源課によると、建築

文化財等の英語解説の充実

- 日本人は解説なしで理解できても、日本の歴史を知らない外国人は、解説がないと理解できない。
- 本来の価値・魅力を理解してもらうために、適切な解説が必要(金閣寺は日本文化の何を象徴しているのか等)



インバウンドの観光は基幹産業に

に関連するプロジェクトも取り上げられている。

神社仏閣など文化財や国立公園について、保存・保護優先から体験活用の方へと舵を切っていることは改革の中でも重要な位置づけになっている。

文化財については20年までに、観光拠点の核として全国で200カ所を整備するほか、わかりやすい多言語解説など1000事業を展開するなど、集中的な支援強化を進めている。文化財は公開、活用することで修理保存の費用を捻出できる。多言語解説については、観光資源課の資料によると例えばある文化財では、「危ないから、入ってはけません」の「危ない

「観光資源の発掘と磨き上げ」 観光庁観光資源課に聞く



長崎県平戸市の平戸城の懐柔櫓。同市はこの櫓を国内初の「城泊」として改修中で、7月にオープンする。事業者は「農泊」で実績のある百戦錬磨グループ、日本航空、内装を手がけるアトリエ・天工人の3者共同事業体

るプロジェクトにはどのようなものがあるか見てみよう。

プロジェクト展開のペースになっているのが16年3月末に策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」である。20年の訪日外国人旅行者数の目標を4000万人に定めたのもこのビジョン。ここでは「観光先進国」の3つの視点と10の改革が示されている。具体的な10の改革には、文化財など建築

から」の英訳を「Because you are dangerous」(あなたは危険人物だからの意味)と記載している例もあった。同課では「英語が稚拙だと感動もなくなる」と話す。文化財の入場料が海外と比べて著しく低いのも、外国人にとっての価値判断を低いものにしてしまっていると指摘する。

国立公園は世界水準の「ナショナルパーク」を実現するために保護すべき区域と観光活用する区域を明確化し、民間の力も使って体験・活用型空間へと集中改善している。日光国立公園では「ザ・リッツ・カールトン日光」が今年夏開業する予定だ。

「城泊」は平戸城で 今夏に本格オープン

古民家を活用した観光まちづくりは、16年に内閣府を中心にしたタスクフォースが発足、まちづくりなどの専門家による官民連携推進チームをつくって全国から寄せられる相談についてオーダーメイドで対応をしている。

最近の動きとしてはスペインの「パラドール」(古城や修道院などを再利用した国営ホテル)のような城泊・寺泊も推進されている。先進事例は、長崎県平戸市の平戸城で、17年、国内初の城泊イベントが開催され、1組の無料招待の募集に対して、約7000組の応募があり、うち半数以上がヨーロッパだった。この人気を受けて、同城の懐柔槽(かいじゅつやぐら)を使った「城泊」営業が決まり、今年7月にオープンする。寺泊は、拝観に加え座禅や写経などの文化体験が可能な寺院が数多く存在することから、宿泊施設としても活用されるよう取り組みを進めている。個室、WiFi、キャッシュレスなどは外国人観光客にとって外せない環境整備だと観光資源課では話す。